

正 信 念 仏 億 24

■曇鸞讃②

天親菩薩論註解 天親菩薩の『論』(浄土論)を註解して、
報土因果顯誓願 報土の因果誓願に顯す。

現代語訳

天親菩薩の『浄土論』を註釈して、浄土に往生する因も果も阿弥陀仏の誓願によることを明らかにし、・・・

○「天親菩薩論註解」

曇鸞大師 (476~542) 67歳往生

※大師が登場した当時の時代状況については前回の講座で紹介

主著『往生論註』 = 天親菩薩『浄土論』の註釈書

『讃阿弥陀仏偈』

天親菩薩のみことをも 鸞師ときのべたまはずは
他力広大威徳の 心行いかでかさとらまし
→ 曙鸞大師の『往生論註』を通さなければ、天親菩薩の『浄土論』の真意は理解できない。

○「報土因果顯誓願」

報土…因位の法藏菩薩の發願・修行に報いて完成された浄土のこと。

報土の因

→ 浄土を建立し、どんなに煩惱が盛んで罪業が重くても必ず救う完全な願い。

報土の果

→ その願いよって寸分違わず完成した浄土

『教行信証』「証文類」(『註釈版』312)

それ真宗の教行信証を案すれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如來の清淨願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、淨なるがゆゑに果また淨なり。知るべしとなり。

→ 「報土の因果」とは、「浄土往生の因果」と解釈することができる。

誓願…『仏說無量壽經』に説かれた法藏菩薩の願い（四十八願）のこと。

『往生論註』(『七祖篇』155)

問ひていはく、なんの因縁ありてか「速やかに阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得」といへる。答へていはく、(中略) おほよそこれかの浄土に生ずると、及びかの菩薩・人・天の所起の諸行とは、みな阿弥陀如来の本願力によるがゆゑなり。なにをもってこれをいふとなれば、もし佛力にあらずは、四十八願はすなはち徒設ならん。いま的らかに三願を取りて、もって義の意を証せん。

(※以下に、第十八願・第十一願・第二十二願が引用される)

ゆゑに速かなることを得る三の証なり。これをもって推するに、他力を増上縁となす。しからざることを得んや。

→ 三願的証

- ① 第十八願力によって速かに浄土に往生する
- ② 第十一願力によって浄土において速かに成仏せしめられる
- ③ 第二十二願力によって衆生を教化する利他のはたらきが与えられる

第十八願

わたしが佛になるとき、すべての人々が心から信じて、わたしの国に生れたいと願い、わずか十回でも念佛して、もし生れることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。ただし、五逆の罪を犯したり、佛の教えを謗るものだけは除かれます。

第十一願

わたしが佛になるとき、わたしの国の天人や人々が正定聚に入り、必ずさとりを得ることがないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

※『一念多念文意』

これらの文のこころは、「たとひわれ佛を得たらんに、國のうちの人・天、定聚にも住して、必ず滅度に至らずは、佛に成らじ」と誓ひたまへるこころなり。

第二十二願

わたしが佛になるとき、他の佛がたの国に菩薩たちが、わたしの国に生れてくれば、必ず菩薩の最上の位である一生補處の位に至らせよう。それぞれの希望によって、自由自在に人々を導くため、固い決意に身を包んで多くの功德を積み、すべてのものを救い、佛がたの国に行って菩薩の行を修め、すべての世界の佛がたを供養し、数限りない人々を導いて、この上ないさとりを得させることも自由にできる。すなわち、通常に超えすぐれて菩薩の徳をすべてそなえ、大いなる慈悲の行を実践できる。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

☆衆生往生の因も果もすべて阿弥陀如来の願力によるものである。その具体的な相について、次の「往還回向由他力」以下、六句で示される。